

関東近郊 4 人旅 2023



2023 年 2 月

旅のチカラ研究所 植木圭二

1 年で最も寒い 1 月、2 月に夫婦でいくつかの温泉宿に泊まってきた。ただ普通に行っても面白くないので、私たち夫婦と関わりのあった 5 組の夫婦を 5 週にわたって誘っての 4 人旅として、関東周辺の宿にそれぞれ 1 泊 2 日で行ってきた。

第一章 鴨川

■今回の旅は 4 人旅

亀の井ホテルという全国展開するホテルグループから特別謝恩プランで安く泊まれるというダイレクトメールが私の手元に届いた。私はこのホテルグループとの付き合いは全くなかったが、私が会員だった「かんぼの宿」が事業譲渡した先が亀の井ホテルということで届いたものだ。

正月明けの 1 月、2 月のこの時期は他に大きなイベントもないので妻と相談した結果、私たち夫婦と関わりのあった何組かの夫婦を別々に誘って 4 人旅をすることにした。具体的には 1 月の中旬から週一のペースで、毎週違う関東近郊の亀の井ホテルに泊まるというもので、ちょうど政府が行っている全国旅行支援の恩恵も受けられる。

第 1 回目は、近所に住む福沢夫妻（仮名）と南房総の「亀の井ホテル鴨川」に行くことにした。

夫妻とは普段から近所付き合いをしている間柄で、旅行にも何回か一緒に行ったことがある。旦那さんは自転車の旅が好きで、火野正平のように全国を旅している。奥さんも旅行好きだが、旦那さんとは旅のスタイルが違うようだ。

■日本寺（にほんじ）と鋸山（のこぎりやま）

私の家からアクアラインを抜ければ南房総の鴨川には 2 時間程度で着くが、せっかく南房総まで行くのだから途中にある日本寺と鋸山に立ち寄る。数年前に訪れた時には、私は歩いてここに登ったが、今回は車で日本寺の駐車場までやってくる。

日本寺は開山が奈良時代の 725 年という古い寺だ。私が旅行記「東関東の旅 2019」で書いたように関東地方は房総半島の南端から人が多く住み始めて反映してきた。

日本寺は何と言っても大仏が有名で、駐車場から近い広場に日本最大の高さ 31m の大仏が座している。この大仏は大きな石の山を大仏の形に彫ったもので、奈良や鎌倉の大仏のように鑄造して作ったものではない。江戸時代の 1783 年に名工が弟子 27 人と 3 年かけて彫った。

日本寺は鋸山の一角にあり、頂上付近は日本寺の境内になっている。大仏が掘れる程なので昔から良質な房州石が採れ、江戸時代には日本でも有数の石切り場だった。そのため頂上付近は石を切り出した跡が垂直のそそり立つ壁になっている。

その絶壁から突き出た「地獄のぞき」という岩がある。鋸山の紹介には必ずこの写真が使われるという名所で、突端まで行けるように柵が設けてあり、今も観光客たちは恐る恐る突端に行って遙か眼下の地獄を覗いている。

地獄のぞきの岩を斜め下から見る場所には百尺観音がある。その名のとおり百尺（約 30m）あり、太平洋戦争戦没者や交通事故犠牲者の供養のために 1960 年から 6 年かけて彫られた。

それよりも古い太平洋戦争前の落書きが観音像前の石切り跡に刻まれている。「明大 佐藤、大角、伊藤、渡辺 1937.8.10」と書かれている。私はこれを見て憤慨し、「この人たちの悪戯が後世まで残る、馬鹿なことをしたものだ」と言うと、誰からか「明治大学の後輩たちが可哀そうだ」という声も聞こえてくる。歴史に名を残すという意味を勘違いしている。

ただ 1937 年は日華事変の始まった年で、4 年後に太平洋戦争に突入、学徒動員もしたが、最後は敗戦になる。この学生たちはそれを知る由もなかった。



【約 30m の百尺観音 左上が地獄のぞき】



【落書き】

尚、日本寺や鋸山については旅行記「千葉鋸山の旅 2019」に詳しく書いている。

■亀の井ホテル鴨川

今宵の宿「亀の井ホテル鴨川」に到着する。まだ新しい感じがして実に気持ち良い。事業移管にともなって内外装をリニューアルしたのだろう。

ロビーの向こうにはお洒落な中庭が広がっている。その真ん中には焚火をする四角い大きな炉のようなものがあって、それを取り囲むようにソファが設置され、テーブルと椅子もいくつか置かれている。ここは中庭なのでオープンエア、つまり野ざらし状態だから全て防水仕様になっているようだ。これは素晴らしい。



【亀の井ホテル鴨川の中庭 中央が炉】

早速最上階にある大浴場に行く。なかなか良い、いやかなり良い。泉質は一般的なものだが、風呂の造りがシンプルながらも広くゆったりとできている。

大きな内湯があって、奥のドアを開けると大きな露天風呂がある。内湯も良いが露天風呂の方がさらにゆったりできる。そして吉旦那さんが既に露天風呂を楽しんでおり、広い露天風呂を独り占めしている。私もその隣にゆっくりと入り、ポツポツと話かけ、やがて世間話に華が咲く。近所で会って話をする時に比べて気持ちも内容も充実しているような気がする。

夕食はビュッフェスタイル（バイキング方式）なので可もなく不可もなくというのが一般的だが、海の近くなので海の食材が豊富だ。と言いながら私はステーキをいただく。最近ではステーキや天ぷらをその場で調理してくれる処が多い。やはり料理は出来上がった時が一番美味しい。

アルコールの飲み放題を注文する。お客が自分でビールを注ぐことになっている。驚いたのはそのビールサーバで、上から注ぐのではなく下からビールが湧き出ようになっている。特殊なビールジョッキを使用しており、ジョッキの下にビール注入用の栓があってジョッキをサーバにセットするとその栓からビールが注入されるので、湧き出ているように見える。最後に横の青いスイッチを押すと泡だけが湧きでる。



【下から湧き出るビールサーバ】

このビールサーバ以外に夕食の味を一層美味しくしているのは、中庭にあった炉に火が入り、私たちの席からはその焚火が見えることだ。夕闇の中の炎によって実に良い雰囲気を作っている。

部屋に戻り、4人で宴会になる。世間話に始まり、どこの店が安いとかお得情報、グルメ美味という身近な話題だが、興味深い話がつづく。

旦那さんは九州男児、奥さんは東北美人という夫婦なので、会話をしていると2人の相性の良さが感じられる。

翌日の大浴場は男女入れ替えになり、男湯は1階の大浴場でこの露天風呂が面白い。正面を向いて横に長い露天風呂は、右から左に徐々に深くなっている。従って自分の好きな深さに入ることができる。ちょっとしたアイデアだが、私にとってあまり経験のない造りをしている。

■誕生寺

鴨川市の東端の小湊漁港の少し先に誕生寺という変わった名前の寺がある。この寺は日蓮が生まれた寺ということで、こんな名前が付いている。

私は実際にここに来る前は香川県の善通寺をイメージしていた。善通寺は空海が生まれた寺で、五重塔もあり、境内は奈良の法隆寺に似ていたが、法隆寺よりもはるかに広がった。しかしここ誕生寺はそんな雰囲気はなく、意外に小ぢんまりしている。

福沢旦那さんの話では日蓮は漁民の子供として千葉県で生まれた。近くにある清澄寺で初等教育を受けているので、最も下層な漁民ではなかったらしい。

山門をくぐると、幼少期の日蓮の像が建っている。漁民の子供には見えない立派な“いでたち”をしている。旦那さんは「開祖だから相当美化されているよね」と言っている。

像を過ぎると左右にたくさんの灯籠が並んでいる。私は旦那さんに「この灯籠1本どのくらいしますか？」と聞くと、彼は「原価はともかくも、奉納料込みで何百万円、大きければ1千万円とかですかね」と答えてくれる。妻たちは灯籠の本数を数え始めるからいかにも主婦だ。

灯籠の行列を過ぎると本堂の前になる。本堂はそれなりに立派なのだが、やはり小ぢんまりしている。



【誕生寺の山門】



【境内の灯籠】

第二章 焼津

■車内で盛り上がる

鴨川旅行から1週間後、今度は下田夫妻と静岡県焼津に向かう。夫妻は私たちがちょこちょこお邪魔していたペンションの元オーナーで、現在は隠居して東京都内に住んでいる。

夫妻は昨年までペンション経営をしていたので、自然に会話の内容はその話になる。旦那さんは様々なお客が来るのでとにかく面白かったと言っている。

私はそれらをもっと知りたく「誰か有名人は泊まりましたか？」と聞くと、彼は「歌手の〇〇、俳優の△△、スポーツ選手の××・・・など」と尽きない。その中でも興味深い団体客があったという。とある政党のちょっと有名な議員たちが勉強合宿に来たと言う。政治家がラフな格好をしているのをはじめて見たことが印象的だったと言う。

もっと衝撃的なお客がいたという。1人旅の女性が予約をしてきたが、当日になってキャンセルの電話が入ってきた。すると翌日に警察から連絡があって、キャンセルしてきた女性が投身自殺をして遺体で発見されたので、生前最後に電話で話した下田さんのところに事情聴取にきたと言う。「もしも彼女が泊まっていたら部屋で自殺したかもしれないね」と、さらりと言っている。

■駿府城

駿府城公園にやって来る。駿府城は徳川家康の居城だったのでとにかく広く、3重の濠がめぐらされていた。最も外側の濠は約700m四方で現在も多く残っている。真ん中の濠は約400m四方で完全な形で残っており、その内側が現在の駿府城公園になっている。最も内側の濠は公園の中で、埋められて現在は平らな地面になっている。

従って濠に囲まれた単なる公園だが、私が今回ここを訪れた理由は家康時代の駿府城の発掘をしているからだ。公園のほぼ中央に徳川家康の銅像があって、その背後の広い地域を発掘調査している。発掘現場というものは一般的にはあまり公開しないが、ここは無料で公開しているから珍しい。



【駿府城公園の発掘現場 赤い○が家康像】

運よく、この発掘現場も含めて説明してくれるボランティアガイドがいるので、お願いして説明してもらえることになる。

まず、ガイドが「家康は何回この城に住んだのでしょうか？」と質問してきた。

私は「今川家に人質になっていた幼少期と、大御所になった時の2回ですか」と答えると、ガイドは「3回です、武田家を滅ぼして信濃と甲斐を加えて5カ国を治めた時にもこの城を拠点にしていました」と言い、さらにガイドは「幼少期、5カ国時代、大御所時代の城は少しずつ異なっております、それらの遺構を発掘しています」と付け加える。

確かに、石垣の大きさや高さが違うようになっている。

「どうして城はなくなったのですか？」と聞くと、ガイドは「家康が亡くなってしばらくして、天守は焼失しました。再建されなかったので、天守の無い城として時が過ぎました」と言う。

さらに「天守は無くても、天守台や石垣が残らなかったのは何故ですか？」と聞くと、ガイドは「明治時代になって日本陸軍が訓練のため埋め立ててしまいました」と言い、さらに「発掘調査はもう少しで終わり、その後は遺構を残して野外ステージにするようです」と言っていた。

駿府城は徳川家康が将軍を退き大御所となって、自らの居城とするために増改築した城で天守台は68m×61mで、江戸城の天守台(45m×41m)を上回り日本一の大きさだったことが発掘調査で分かった。関ヶ原の戦いに勝利して江戸幕府を開いたとはいえ、当時は大坂城には豊臣秀頼がまだ健在で、駿府城が豊臣方との戦いに備えた実戦的な城であったことを物語っている。

■亀の井ホテル焼津

今宵の宿「亀の井ホテル焼津」に着く。鉄筋コンクリート8階建ての小奇麗な宿で、焼津の街並みや港を見下ろす標高約60mの小高い山の上に建っている。

私たちは7階の部屋に案内される。最初に目に入ってきたのは言うまでもなくその眺望だ。部屋の窓から焼津の街並み、焼津港、そして太平洋も大きく広がって、私たちは「おおー、凄い景色だ」と自然に声が出てしまう。おそらくはこの眺望がこの宿の最大の売りになっているのだろう。



【亀の井ホテル焼津の7階の部屋からの眺望】

この眺望をお茶請けにして4人でお茶を飲む。約1時間くらいだろうか、街並みが暮れなずみ始めて夕陽が海に落ちようとしている光景が抜群にいい。

そして入浴になるが、大浴場は私たちの部屋の1階上の8階にあり、眺望が良いのは言うまでもない。夜景を見ながらの入浴もまた格別で、焼津の街が宝石のように輝いている。

夕食は、料理も出し方もなかなか良い。マグロの刺身は新鮮で美味しい。豆乳鍋には地元産の「ふじのくにいきいきポーク」が使われ、ブリの照り焼きのブリ大根ステーキ、鰻の玉地蒸し、ご飯は静岡らしく茶飯に釜揚げシラス、それらが時間を置いてちょっとした説明を添えて出てくる。



【最初に出てきたマグロの刺身や豆乳鍋など】



【ブリ大根ステーキと鰻の玉地蒸し】

下田さんが経営していたペンションでも、奥さんが作る料理と旦那さんのオーナートークが評判だった。そのペンションの開業についての話になる。

旦那さんが55歳の時に会社を定年退職してペンションを開業した。それは旦那さんの夢だったとばかり思っていたが、実は奥さんの強い願望だったという。私はいつも旦那さんがリードして、奥さんは内助の功でサポートしているとばかり思っていたが、違う一面を知る。これだから夫婦の相性は面白い。

■久能山東照宮

翌日は家康が祀られている久能山東照宮に向かう。カーナビには久能山東照宮をセットしたが、たどり着いた場所は日本平のロープウェイ乗り場だ。確かにこのロープウェイに乗れば東照宮に行けるが、往復と拝観料で1人1750円と結構な値段になっている。

案内の人に聞くと、東照宮に行く方法はこのロープウェイ以外にも久能山の下から1159段の階段を登る方法もあるというが、私たちは1159段と聞いて即座にロープウェイを選択する。

日本平にあるこの駅の標高は280m、ロープウェイに乗ると標高140mの東照宮駅に着くので、標高差140mを約5分で下り久能山東照宮に到着する。通常のロープウェイは上の高い所に行くものだが、ここでは逆転して低い所に移動する手段になっている。

久能山東照宮は徳川家康の墓所になっている。家康の墓所と言えば日光東照宮だと思っている人が多いが、実は家康自らの遺言によって久能山東照宮に葬られた。そして一周忌が過ぎたら日光に祀り東昭大権現として関東を照らすという遺言もあった。そのために久能山から日光までを何千人もの行列で墓を移したと言われている。

しかし昨日の駿府城公園のボランティアガイドの話では、遺体は久能山東照宮にそのままあるはずだと言っていた。廟の宝塔は創建当初は木造だったが、3代将軍徳川家光により現在の石造宝塔になったと案内板に書かれている。遺体もないのにわざわざ石造宝塔にはしない。

一体どちらにあるのだろうか、墓を掘り起こすしかないのか。いや、分骨という手もある。

立派な山門をくぐると重厚で金を至るところに装飾とした豪華絢爛な拝殿と本殿がある。そしてこの拝殿と本殿は国宝に指定されている。



【国宝の拝殿と本殿】

本日はその国宝の拝殿で結婚式が行われている。国宝で結婚式とは何と羨ましいことだ。それゆえだろうか新郎新婦も参列者も何となく気品が感じられる。

居合わせた観光客からは「おめでとう！おめでとう！」の聲がかり、新郎新婦は「ありがとうございます」と、幸せそうな顔で返事をするのがとても印象的だった。



【拝殿での結婚式】



【廟の石造宝塔】

第三章 熱海

■旅行アルバムの達人

第3回目になる今回の旅のゲストは鶴田夫妻で、私たちとは2018年の旧ユーゴスラビアの旅で知り合い。その後も国内温泉旅行にも一緒に行っている。(旅行記「旧ユーゴの旅2018」と「格安！冬のバス旅2020」参照)

私たち夫婦は埼玉県にある鶴田さんの自宅に行き、そして今、奥さんが入れてくれた美味しいコーヒーをいただいている。少しの時間だと思ったが、1時間以上も話し込んでいる。そうなった理由は旦那さんが作成した旅行アルバムが素晴らしいからだ。

旦那さんはカメラ好きで旅行に行くとき多くの写真を撮って、プリントアウトしてパンフレットや入場券などと一緒に旅行アルバムにしている。良く見かけるものと言えばそれまでだが、彼のものはB4サイズ横型で厚さは3~4cmもある。従ってちょっと目を通すといっても結構な時間がかかる。私たち夫婦も行ったクロアチアの旅(私の旅行記では旧ユーゴの旅)を見ているが、1冊30分くらいはかかってしまう。



【旅行アルバムの表紙】



【旅行アルバムの中】

鶴田夫妻には5人の孫がいて、その孫が中学生になる時に本人が行きたい外国に1人だけ旅行に連れて行くという。夫妻の言葉を借りれば「一本釣り」と呼んでいる。孫にとっては初めての海外旅行に親も兄弟も友人もいないのでプチ一人旅で良い経験になる。親にとっては金も掛からずに子供を海外旅行経験させてもらえる。連れて行く夫妻にとっても刺激があって面白い。全ての関係者がWin-Win-Winの関係になる。この話は以前の旅で聞いていたが、その旅行アルバムを見せてもらうことになり一本釣りの旅の様子を感じ取ることができる。

旦那さんは「これらのアルバムは百数十冊もあるけれど、私が死ぬと孫の写真を除いて捨てると言われていますが、死んだ後は勝手にしろと言っていますよ」と笑いながら言っていた。

■石垣山一夜城公園

コーヒーとアルバムを堪能して出発し、車を走らせ小田原市街を見下ろす山の上にある「石垣山一夜城跡」にやって来る。この城は戦国時代の終焉に小田原城に立て籠る北条氏攻略のために豊臣秀吉が一夜にして建てた城として有名だ。

小田原城は戦国時代では最強・最大の城といわれており、北条氏は城の防御に絶対的な自信があつて城は絶対に落ちないと思っていた。何しろ外郭は9kmもあつて、そこに北条方6万人が籠城していた。事実、城は落ちなかった。しかし降伏した。秀吉も簡単に落ちないこの城の攻略のために22万人の大群で陸と海から包囲した。その本陣として小田原城を見下ろす笠懸山に石垣の城を築いた。そのために後世では石垣山と呼ばれるようになった。その山の頂上に山と一体を成す城を約80日間で造った。短期間で造ったにしてはしっかりとした石垣でできており、かなりの長期戦を見据えていたのに違いない。

よく一夜城を一晩で造った城だと勘違いしている人がいるが実は違う。80日間で築城し一晩で周囲の樹木を伐採して、一夜にして城が現れたので一夜城と呼ばれている。そして小田原城に籠城していた北条の兵は一夜にして現れた城を見て驚き、士気を失ったと言われている。

私たちはその石垣山一夜城跡を見て回る。突貫工事で作った石垣も、本丸跡や二の丸跡も平らな広場として残っている。標高262mの石垣山からは秀吉の目線で小田原城を見下ろすことができる。



【一夜城跡の石垣】



【石垣山から見た小田原城（赤○）】

一夜城跡の駐車場の隣に「一夜城ヨロイツカファーム」という約2000坪の農園を併設したレストランがある。このヨロイツカファームはパテシエの鎧塚俊彦が2011年に開設したもので、とても人気がある。本日は日曜日、それも昼過ぎということもあつて30人くらいの方が外で入店待ちをしている。

この農園の一角に記念碑があり、鎧塚俊彦の妻で2015年に亡くなった女優の川島なお美の直筆メッセージで「美しく生き生きしたファームガーデンは私の夢です その夢をかなえてください 今までありがとう なお美より」と書かれている。

私たちが写真を撮っていると他の来園者も集まって来る。年配者は「あの、川島なお美ですか」と言うが、若い人は「この人、誰？」とそっけない。彼女は1960年生まれで80年代に女子大生タレントとして活躍し、1997年にテレビ版「失楽園」に出演した。ワインを愛しフランスの四大ワイン産地から騎士号を授与されて、「私の体はワインでできている」という名言を残している。

■熱海と言えば

熱海と言えば「金色夜叉」と「お宮の松」が有名だ。主人公の貫一がお宮を足蹴にしている像とお宮の松は熱海の海岸にあり、ここでも年配の観光客が写真を撮っている。

金色夜叉は尾崎紅葉の小説で1897年から新聞に連載し、5年間続いたが連載中に作者が死亡して未完で終わっている。それでも精神的な豊かさは金では手に入らないというテーマは十分に伝わってくる。

前編・中編・後編までで一応区切りがついており、その後には付け足しのように続、続続、新続金色夜叉と続く。

尚、原文では女性も男性も3人称は全て彼になっている。この頃の日本文学はhe、sheの区別がない。



【お宮の松、貫一・お宮の像 観光協会 HP より】

その金色夜叉のあらすじを記す。

貫一とお宮は許婚（いいなづけ）だったが、お宮は大富豪にみそめられ、金に憧れ求婚に応じて大富豪のもとに嫁ぐ。それに激怒した貫一は熱海でお宮を問い詰め、お宮を蹴り飛ばす。この時の貫一のセリフ「来年の今月今夜のこの月を僕の涙で曇らせてみせる」は有名だ。貫一は復讐を誓い、強欲非道な高利貸になる。一方でお宮は後悔し始める。

数年後、お宮は貫一の恨みをとくためにこの境遇を捨てようと手紙を出す。貫一は手紙を見ようとしなない。しかし友からお宮の心情を伝えられ、夢の中でお宮を許す。（後編が終わる）

そんな時に貫一は仕事で塩原の温泉宿に行き、偶然にも隣室で男女が心中しようとするのを止めた。話を聞くとこの男女は金をとるか愛をとるか悩んだ末に愛をとって心中を選んだ。このことが貫一の心を動かし、そして現在のお宮の不幸な状況を知る。お宮は以前よりも増して思いの丈を訴えた手紙を貫一に出した。（ここで絶筆）

熱海の海岸での別れのシーンにお宮の松があると思われているが、実はお宮の松は実在しない。もともと小説とはフィクションだから実在しないのは当たり前だが、そのような松は小説の中にも出てこない。私が調べた限り、訳文でも原文でも出てこない。ここが“今月今夜の・・・”の名セリフの場所だと松によってアピールするために後世になって無理矢理とって付けたようだ。

その証拠に初代の松は「羽衣の松」と呼ばれていた。羽衣伝説は日本各地にあって熱海から近い三保の松原にもあるのだから熱海にあってもおかしくない。問題は1919年に、その松の近くに金色夜叉の句碑が建立されてからお宮の松と呼ばれるようになったことだ。この頃は金色夜叉が連載された後で、世間から脚光を浴び頻りに映画化されていた。そして初代の松が枯れて1966年に2代目の松が植えられ、その松の隣に貫一・お宮の像が建立された。その頃の熱海は温泉地として不動の地位を築いており、何でも商売にしようという魂胆が見えてくる。

■亀の井ホテル熱海別館

お宮の松は海岸近くであり、その周辺は観光開発され尽くされている。そのため巨大資本が投下されたホテル群は海岸から山の方へ広がり、現在は山の上の方まで建ち並んでいる。

私たちが本日泊まるホテルも山の上にあるので、私の車は多少うるさいエンジン音を出しながら狭い急坂を登っている。たどり着いたと思ったが、「亀の井ホテル熱海本館」と看板が出ている。私たちは別館を予約しているのでさらに車を走らせて「亀の井ホテル別館」に到着する。

別館は標高 176m の高台にあり、さすがに景色が良い。本館を上から見下ろす位置にあって、熱海の街を一望できる。温泉街や海には簡単に行けないが、この景色だけでも十分に満足できる。

当然、大浴場からの眺望も良く、長時間この景色を眺めながら入浴を楽しめるように露天風呂は少し温めになっている。風呂に浸かりながら夕景、そして朝焼けもまた見事で素晴らしい。

ホテルは小ぢんまりとしているが、なかなかよく出来ている。それは今まで泊まってきた亀の井ホテル共通に言えることだが、豪華絢爛とは言えないまでも、簡素ながらも小奇麗で品があって窮屈感はない。部屋も大浴場もロビーも必要最低限の機能を保ちながら綺麗に整っている。おそらくはかんぼの宿のコンセプトなのだろう。



【亀の井ホテル別館からの眺め 右手前が本館】

■夕食の後

鶴田旦那さんも私もビールが好きで旅行先ではよく一緒に飲んでた。今宵も夕食の後に4人一緒に部屋飲みをすることになる。話題は旅行のこと、子供や孫の話が中心になる。

しかし会話をしているとこの夫婦の力関係というものが垣間見ることができる。旦那さんはテキパキと何でも先に行き、奥さんは後からついて行くタイプのように見えるが、実は奥さんが影のボスのように旦那さんをコントロールしているようにも見えてくる。

そんなことを奥さんに聞くとまんざら悪い気はしないようで、奥さんは娘さんの言葉を紹介してくれた。それは「お母さんの最高傑作は、私たちではなくてお父さんだね」というものが実に言い得て妙で、実態を捉えている気がする。それを旦那さんも重々知っていて受け入れていることが印象的だった。

■パワースポット

熱海駅の隣には来宮（きのみや）駅があり、その駅の近くには来宮神社がある。もちろん駅が先ではなく神社が先にあった。来宮神社は古くから来宮大明神と称され、周辺住民の熱い信仰を受けて、多くの神が祀られている。

古くは出雲の神々が伊豆地方に進出した時、熱海の里が海と山を臨み、温泉に恵まれ風光明媚な地で生活条件の整っていることから住居を決めて祀られたとか。

五十猛（いたける）神が熱海に鎮座される際、地元民と旅人を守護しようと神託をつけられたことから、伊豆に来る旅行者が多く参拝するとか。

日本武尊（やまとたける）が東征して箱根路からこの地に軍を進めた時、住民をいたわり、産業を奨励した功績と武勲を称えたため祀られたとか。

征夷大將軍の坂上田村麻呂は戦の勝利を祈願し、各地に分霊を祀ったと伝えられ、現在では全国四十四社の来宮神社の総社として信仰を集めているとか。

どれも言い伝えなので真偽の程は分からない。しかし言い伝えではない現実としてパワースポットがある。神社の奥に鎮座するご神木は樹齢約 2 千年の立派な楠木で、多くの人たちがこの巨木からパワーをもらおうと参拝にきている。巨木は国の天然記念物に指定されており、幹周りは約 24m もあるので環境省の調査では全国 2 位の巨木と認定されている。

ちなみに 1 位の巨木は鹿児島県蒲生町の八幡神社にある楠木だという。私は 4 位の青森県深浦町のイチョウを昨年秋に見て来たが、4 位でも十分に立派で大きいものだった。



【来宮神社のご神木】

■もう食べられない

鶴田夫妻を自宅に送っていく際に、夫妻が是非紹介したいレストランがあるから食べて行こうということになった。その店は「ナポリのかまど」というお洒落なイタリアンレストランだ。

外観はもちろん内部も雰囲気の良いレストランで、旦那さんは「ここは私に全て任せて下さい」と言いながら、顔馴染みらしい店のスタッフに次々に注文し始める。

ここでもテキパキと旦那さんが注文しているが、時々奥さんが「こっちの方がいい、それはやめた方がいい」というチェックが入る。その絶妙な間合いが、見ていても楽しい。

そして出てきた料理はサラダ、ピザ、パスタ、味はもちろん美味い。そしてボリュームたっぷりでその量にも驚いてしまう。

ようやく食べ終わったと思っていたら最後に出てきたデザートはシナモンメープルトーストがまた凄い。それでも味が良いから結局完食してしまった。

家に着いて夕食は食べる必要がなかった。いや、とても食べられなかった。



【シナモンメープルトースト】

第四章 霞ヶ浦

■即決の旅

正月明けのある日、私は仙台に住む菅原夫妻に LINE を入れた。内容は「2月5日から1泊で温泉旅行に行きませんか?」というもので、直ぐに返事がきて「是非行きます」と即決だった。その後少ししてから「ところで何処に行くのですか?」と問い合わせがきた。私は温泉名も言わずに誘ったことに気が付き、改めて「茨城県の霞ヶ浦近くの潮来で、ちょっと珍しい場所ですが、一応温泉です」と返した。

この潮来（いたこ）という漢字も場所も、ある年代以上の人は知っているが、そうでないと馴染みがない。それは歌手の橋幸夫のデビュー曲が「潮来笠」だったからで、1960年のことになる。夫妻も知っていたのだろう。

菅原夫妻と私たち夫婦は 2016 年に行った地球一周の船旅で知り合い、船を降りてからも何度か一緒に旅行をする関係になっている。

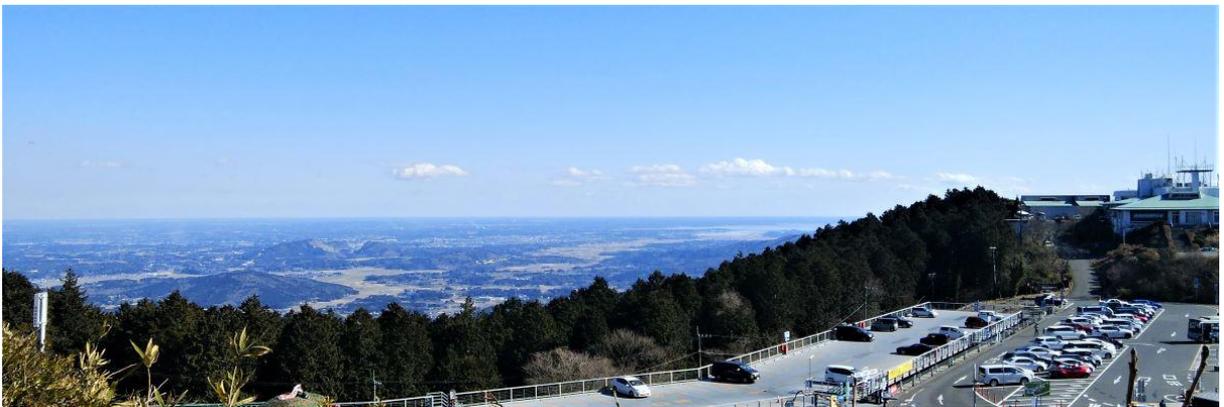
待ち合わせ場所を東北新幹線の小山駅として、そこまで私たちが車で迎えに行き、今回の旅が始まる。

■上から眺める

茨城といえば筑波山が有名で、筑波山は広い関東平野にポツンとある標高 877m の山で、この低さで百名山に選ばれている。ちなみに百名山では筑波山が一番低く、次は九州の開聞岳（標高 922m）になっている。百名山に選ばれた理由は地元民に愛され歴史があるからだろう。もちろん仙台に住む夫妻にはあまり馴染みがなく、それでもガマの油は知っていると言っている。

標高 530m のロープウェイの駅まで車で登れるので、今回は山頂ではなくそこからの眺めを楽しむ。本日は快晴で眺めは良く、関東平野の半分くらいは見えるだろうか、日本の湖で第 2 位の霞ヶ浦や東京スカイツリーも見える。

この景色に夫妻は満喫しているようだ。特に奥さんは子供のようにはしゃいでいる。山体を見るのも、登るのも、そこから関東平野を眺めるもの全て初体験と言っている。そして「ガマの油のガマは何処にいるの？」と聞いてくるので、私が大きな張り子のガマを指差すと、「こんなに大きいの!？」とどこまで本気なのか分からない反応が返ってくる。



【筑波山のロープウェイ駅からの眺め】

ガマの油の由来は大坂の陣に徳川方に従軍した筑波山中禅寺の住職のガマの油で作ったという妙薬が評判になったからで、住職の顔がガマに似ていたという説もある。

しかしガマの油が有名になった本当の理由は、江戸時代のガマの油売りの口上にある。

口上は、筑波山でしか捕れない「四六のガマ」と呼ばれる霊力を持ったガマガエルから油をとる方法から始まる。ガマは自分の容貌を美形だと信じているが、周囲に鏡を張った箱に入れられ自らの醜悪さに驚き脂汗を流し、この汗を集めたものが万能薬「ガマの油」だと言う。

そして半紙を取り出し、先の方だけ切れるようになっている特殊な刀を使う。半紙を半分にして切り、一枚が二枚、二枚が四枚、四枚が八枚、八枚が十六枚に・・・と言いながら切って、最後は紙片を紙吹雪のように吹き飛ばす。刀の切れ味を示した後に切れない部分で腕を切ったふりをしながら腕に血糊を塗って切り傷に見せる。その傷にガマの油をつけて拭き取り止血効果をアピールする。またガマの油を塗った腕を刀で切ろうとしても切れず、防護効果も示す。

この口上を実際に観たい気持ちになり、観たら買いたくなりそうだ。尚、口上の保存会もあり、つくば市の無形民俗文化財に認定されている。

霞ヶ浦に架かる霞ヶ浦大橋を渡ると「霞ヶ浦ふれあいランド」という公園施設があって、そこには高い塔がそびえ立っている。この塔ならば霞ヶ浦が一望できるだろうと、私たちは高さ 60m の塔に登って下界を眺める。霞ヶ浦全部そして先ほど登ってきた筑波山も見える。実に素晴らしい景色をみせてもらえた。



【霞ヶ浦ふれあいランドの塔とそこからの眺望 霞ヶ浦の向こうに筑波山が見える】

■宿でくつろぐ

霞ヶ浦（北浦）の西岸の少し高台にある「亀の井ホテル潮来」に到着する。それにしてもホテル名に“潮来”を使うとは、ちょっと理解できない。霞ヶ浦の方が全国的に有名なのに。

霞ヶ浦とは西浦、北浦、外浪逆浦（そとなさかうら）の 3 つの湖で、一番大きい西浦だけでも霞ヶ浦を指すこともある。

部屋に荷物を置き大浴場に行く。湯は温泉でナトリウム塩化物泉なので多少しょっぱくて少しヌルヌルしている。中温浴、低温浴、寝湯という 3 つの浴槽があってそれぞれ温度が異なり、寝ながらゆっくり浸かれように寝湯が一番ぬるくなっている。

大浴場は最上階にあるので、温泉に浸かりながら霞ヶ浦が見えて景色はなかなか素晴らしい。寝湯は水平ではなく少し斜めになっており、枕に頭を乗せると霞ヶ浦を見ながら気持ち良く寝ることができる。私の右隣の人は本を読んでおり、左隣の人は気持ち良さそうに寝ていて時々イビキも聞こえてくるから相当にリラックスしている。

この温泉や風呂にはあまり期待してこなかったが、何だか得した気分になる。人は期待していなかったことや予期せぬことに感動するとその感動は増幅される。



【大浴場から霞ヶ浦の北浦を見る】

夕食も予期せぬことで感動する。先付け、刺身、あごだし仕立ての豚しゃぶ、カラスカレイの煮付け、メヒカリの南蛮漬け、ブリのソテー、どれもいい味に仕上がっている。そして私たちが感動したので白米と味噌汁で、どちらも地元産のコシヒカリとシジミ汁で、お代わりも自由になっている。味はもちろん美味しい。

シジミが霞ヶ浦で獲れるのかと不思議に思って若い女性スタッフに聞くと、彼女は「涸沼という大洗の近くの淡水湖のものです」と答えてくれる。その答え方が慣れたものなので、いつも同じ質問をされているようだ。

夕食後は部屋でランプの“七並べ”に興じる。と言っても普通の七並べではなく、菅原旦那さんが考案したオリジナルの七並べで、これがなかなか面白い。

ルールは参加者以外にもう1人分のカードを余分に置いて、並べるカードがない人はそこから引く。さらにそのカードが無くなったら、他の参加者全員のカードを引くという。

旦那さんの隠された才能を知ることになる。

ランプが終わって9時、亀の井ホテルグループではこの時期夜食の無料サービスを実施しており、ハーフサイズのタンタンメンを食べることができる。これがなかなか好評で今回の4人旅ではいつもご馳走になっている。

そして今晚もランプの死闘を終えた4人は、気分一転してルンルン気分で食べに行く。小腹の空いたこの時間帯に心憎いサービスだ。

朝食はビュッフェスタイル、あのシジミ汁もあって、もちろんお代わり自由なので多くのお客が取っている。皆飲み過ぎたのだろうか。

■鹿島神宮

翌日は鹿島神宮を参拝に行く。その途中にある北浦に建つ鹿島神宮「西の一之鳥居」に立ち寄る。ここに立ち寄った理由は水中にある鳥居としては日本一の大きさを誇っているからで、そのような鳥居は広島県の厳島神社が有名だが、厳島神社のものは16.5mなのに対してこの鳥居は18mある。この鳥居は2代将軍徳川秀忠が奉納し、その姿も立派だが、鳥居から鹿島神宮本殿まで直線で2kmもある。鹿島神宮の大きさ、威厳が感じられ、さすが常陸国一之宮だ。

それにしても奥さんはこんな見たことがないと驚いて感激してくれる。連れてきた私としては、その反応にありがたさを感じる。



【鹿島神宮 西の一之鳥居】

奥さんは育ちの良さからか天真爛漫なところがあって、旦那さんはそれを見守りながらも要所をリードしている。こんな夫婦も面白い。

■JAXA（宇宙航空研究開発機構）

茨城県南部の名所と言えば、筑波山、霞ヶ浦、そして鹿島神宮になるが、私が推すのはつくば市にある研究機関である。

実はこの類の研究機関見学に詳しい私の友人から「つくばに行ったら JAXA、国土地理院の地図と測量の科学館、筑波実験植物園、産業技術総合研究所の地質標本館などが面白いよ、何と言っても無料というのもありがたい」と聞いていた。別の旅行で友人たちと JAXA と国土地理院に行って好評だった。（旅行記「茨城の旅 2022」参照）

その JAXA に行く。入口のゲートをくぐると大きな「H-II ロケット」が出迎えてくれる。もちろん本物で直径 4m、長さ 50m もある。奥さん連中は本物と聞いて驚いている。

展示館「スペースドーム」に入ると宇宙開発の世界が広がる。「きく1号」から「きく8号」までの日本の宇宙開発の黎明期のものから「こうのとりのり」、「かぐや」、有名な「はやぶさ2」もある。それが全て本物だということに菅原夫妻も私の妻も感激の連続だ。本物ではないが国際宇宙ステーション（ISS）にある日本の実験棟「きぼう」の実物大模型もある。

奥さん連中は「孫たちを連れてきたらきっと喜ぶね」と言っている。人は誰かに喜んでもらうことにある種の幸せを感じるものだ。



【H-II ロケット 背後は JAXA の建物】



【はやぶさ2】

展示館を出ようとしたら派手なツナギ姿の小さな男の子が私たちに目の前に立っている。私たちは一瞬言葉を失った。それは NASA（アメリカ航空宇宙局）や JAXA の宇宙飛行士のユニフォームと同じものを着ているからだ。そして男の子の後ろから母親らしき女性が現れる。

彼女と話をすると「フロリダの NASA に行った時に買って来たものです」と言う。そして「せっかく NASA まで行って買って来たのに、ここにも同じものが売ってました」と残念そうに言っている。

この言葉を聞いて、奥さん連中は土産物ショップに向かって走り出した。

JAXA は老若男女が楽しめる。

第五章 九十九里

■薪ストーブの前で

5回目を迎える4人旅は私の大学時代からの友人の大川夫妻だ。彼と私は大学時代に50日間の日本一周旅行をした。それだけではなくヨットを共同購入し、自主映画を製作し、ともに青春時代を楽しんでいた。もちろん奥さん同士も結婚前から知っている。

今回、私が「4人で一泊旅行に行かないか」と誘ったら、彼から「うちに前泊してから出発しないか」と返ってきた。私は即座に「それ、いいね〜!」と喜んで返した。

喜んでそう返した理由は、彼の家にある。

それは私が54才の時、彼と久しぶりに会って酒を酌み交わした。最初は他愛のない話が続いたが、彼は「定年退職後に無理矢理やりたいことを探してもなかなか見つからない、だから50代のうちに見つけておくべきだ」と言った。私は「そうかもしれないね、それで君は何をやるの?」と聞き返すと、彼はすかさず「家を建てる」と答えた。私は驚いて聞き直すと「ハンドメイドで家を建てる」、つまり家を自作すると言った。

ただし奥さん含め家族は大反対だったという。それでも家族の反対を押し切って着工して、私が陣中見舞いに行った時には奥さんも壁塗りを手伝って夫婦2人で家づくりをしていた。

そして家が完成し、招待を受けて私たち夫婦で泊まりに行った。どこを見ても素人が作った家にはとても見えなかった。実は彼が自分で家を建てたいと思ったきっかけは薪ストーブで、随所に自分のこだわりを入れて薪ストーブを中心にした家を建てることだった。

それから何回か、彼の家に泊まりに行った。夫婦で、あるいは子供たちも一緒に行って、薪ストーブの前で夜を過ごした。

今夜も薪ストーブに火を入れて、4人でグラスを傾ける。音楽はビートルズに始まり彼が最近ハマっているという沖縄の3人組BIGINで、歌は荒木一郎の曲「空に星があるように」だから面白い。話題は昔の思い出話はもちろん、大学時代の友人たちの現況、子供や孫のこと、昨今の社会情勢、日本の将来まで幅広い。

そんな中、彼は面白い資料を見せてくれる。それは彼独自の視点で作った発表資料で、国際問題をテーマにしている。何故そんな資料を作ったか理由を尋ねると、なんと彼の実家では毎年正月に一族が集まって持ち回りで発表会を行っているという。正月で親戚が集まれば飲みや歌えと相場が決まっているが、それが真面目な内容の発表会とは恐れ入ってしまう。彼にはいつも驚かされてしまう。



【薪ストーブ】

■自虐的で面白い銚子電鉄

翌日、関東の東端の銚子電鉄に乗ることを目的にして大川の車に乗って出発する。

私は昨年、銚子電鉄に乗っているが、3人は初めての体験になるので、車の中で銚子電鉄について私が簡単に説明する。赤字でいつ潰れるか分からないが頑張っており、車内や駅舎には「電車をとめるな！」や「絶対にあきらめない」といった文言が目にとまるよ、と話す。

銚子駅に到着する。銚子電鉄の銚子駅はJR銚子駅のホームの外れに駅舎があって、到底始発駅の駅舎には見えない。まず3人はこの駅舎に驚いている。

駅舎に入ってお知らせや宣伝を見ていると、随所に赤字ですが頑張っていますという意気込みが伝わってくる。



【JR銚子駅のホームに端にある銚子電鉄の銚子駅】

線路はたった6.4kmしかない。それを19分で走るのだからかなり遅い。2017年に「カメラを止めるな！」という映画が大ヒットして、それにあやかろうと「電車を止めるな！」を銚子電鉄が映画化した。サブタイトルの「のろいの6.4km」は“呪い”と電車が“鈍（のろ）い”を掛けている。3人は「ここまで言うか」と、これもまた驚いている。

しかし「2021年度はおかげさまで黒字でした」というお知らせが貼ってある。大川は「やったね」と言って自分のことのように喜んでいる。

銚子電鉄の切符は銚子駅では売っておらず、車内で車掌から買うようになっている。そして銚子電鉄の2両編成の電車が入ってきて、結構な人数の乗客が降りて来る。その電車に乗り込むと、銚子電鉄の制服を着た金髪の若い女性が常連客らしい人たちと明るく挨拶を交わしている。

その彼女が運転席に座り、発車のベルを鳴らし、電車が走り出す。私は勝手に彼女が車掌だと思っていたが、なんと運転士だった。小さな鉄道会社なので1人で何役もこなさなくてはならないので、若者にも重要な仕事が任されるのだろう。

電車が走り始め、ひよろつとした若い男性車掌が切符を売りに来たので切符を買う。そして私は車掌に「今日は、乗客は多い方ですか？」と聞くと、彼は「平日よりも多いですが、日曜日としては、まだ2月なのでそうでもないですね」と答えてくれる。車内を見渡すと満席とはいかないまでも、ところどころに空席がある程度で結構人が座っている。さすが黒字化しただけのことはある。

車掌は「銚子電気鉄道」と書かれたカバンを持っている。実は1年前に銚子電鉄に乗った時に若い車掌が持っていたカバンを思い出した。その時の様子は以下のようなものだった。

『私が「新しいカバンですね」と声を掛けると、彼は「支給されたばかりでして・・・」と嬉しそうに答えてくれる。「新入社員ですか?」と聞くと、彼は「一週間前に入社しました」と言っている。同乗している私の友人たちは顔を見合わせて「えー! 一週間で実践投入? それにまだ3月だよ」と驚きを隠せない。それでも彼はニコニコ笑いながら「頑張ります!」と答えてくれた。初々しくまだあどけない超新米の車掌だったが、純粋な目をしていた。』(旅行記「千葉ローカル線の旅 2022」から抜粋)

その話を彼に話すと、彼は「それ私ですね、2~3年に1人採用されるだけなので・・・」と笑顔で答えてくれた。彼のカバンは1年の歳月で少し風格が出てきたようだ。

銚子電鉄は住民に公募したニックネームが各駅に付けられている。銚子駅は「絶対にあきらめない」、笠上黒生駅は「かみのけくろはえ」、終着の外川駅は「ありがとう」など、駅のホームでよく見かける行先表示板にもその名前が書かれている。

外川駅で降りる。NHK朝の連続テレビ小説「澁くし」の撮影地だったという古い看板がある。

本銚子(もとちょうし)駅は「上り調子、本調子、京葉東和薬品」と書かれており、タレントのひろみがテレビ番組の中で24時間リフォームした駅舎が人気になっている。

犬吠駅で降りる。ここには銚子電鉄の売店があって、名物の「ぬれ煎餅」や「まずい棒」などを売っている。まずい棒の展示は「崖っぷち!」と書かれており、崖のように商品が置かれている。

そのまずい棒の販売祈願に「まずえもん神社」がある。といっても賽銭箱があるだけだ。しかし面白いお知らせの紙が貼ってあり、こう書かれている。

「お客様各位 今般、まずえもん神社建立にあたり鳥居を設置する予定でしたが、諸般の事情により当面の間、当社社員の「鳥居誠一」により代用させていただきます。つい先日電車運転手の国家試験に合格した縁起の良い若手社員ですのでご利益があるかもしれません」と、隣にはその鳥居社員の写真も貼ってある。



【まずい棒の展示 お題「崖っぷち!」】



【まずえもん神社】

犬吠駅から有名な「犬吠埼の灯台」まで歩いて行く。途中で原付バイクを先頭に暴走バイクが数台やって来る。すると大川は「暴走族に会えて、千葉に来た甲斐があった」と言っている。確かに房総だから暴走か、奥さん連中も納得している。私が「この岬は音痴の人の別名にもなっている」と言うと、奥さん連中は「なんで？」と聞いてくる。私は「調子（銚子）っぱずれ」と言いながら、銚子電鉄のノリになっていることに気が付く。

■ 亀の井ホテル九十九里

今宵の宿は「亀の井ホテル九十九里」、ちょっと前までは「かんぼの宿旭」だった。旭市は銚子市に隣接する市だが、全国的には九十九里の方がはるかに分かり易い。かんぼの宿から亀の井ホテルに事業移管する際に、民間企業で名前を旭から九十九里に変えた。それにしても官公庁のネーミングセンスはひどいものだ。市町村名を付ければいいというものではない。

ホテルにチェックインして、部屋に入るとその造りがちょっと変わっている。ツインベッドの洋室だが、小上がりのような部分があり、畳ではなくカーペットが敷いてある。私にして初めての体験になる。

部屋はオーシャンビューになっており、目の前には九十九里浜が広がり幾重もの白波が押し寄せている。



【部屋の小上がりのような部分】



【部屋から見る九十九里浜の海】

大浴場は 2 つあり、1 階の大浴場は日帰り入浴客も受け入れており、いろいろな浴槽があって複数の入浴コースが設定されている。もちろん露天風呂もある。10 階は宿泊客だけが入れる展望大浴場があり、小さいながらも露天風呂もあって最上階なので眺望が良い。

温泉は海の近くなのでしょっぱい。温泉成分表の掲示はなく、ナトリウム-塩化物強塩温泉（中性高張性低温泉）とだけ書かれている。推定すれば湧出温度 25℃以下、pH は 6~7.5 だろう。

夕食はビュッフェスタイルではなく、個別提供になっている。今回の 4 人旅では 5 つの宿に泊まったが、2 つがビュッフェスタイル、残りは個別提供だった。私の旅友にはビュッフェスタイルの方が自由に選べるから好きだという人もいるが、料理は鮮度が重要だ。出来上がった時が一番美味しいということからすれば、やはり個別に時間差提供するのがベストだろう。

料理はパンプキンスープ、クリームチーズ豆腐、刺身はマグロとカンパチが出てきた。面白いことにカンパチは塩で食べると美味しいと女性スタッフが教えてくれて、地元産の海塩が添えられている。その他にはカニと野菜の鍋、ジャコ山菜おこわ、粥南蛮漬けとなかなか美味しい。

朝食はビュッフェスタイルで、私たちの目を引いたのは“こだわりの卵”というもので、これをTKG（卵かけご飯）で食べて最高だった。この卵は近くの養鶏場のもので10個入り500円でホテルの売店で売っている。そして鯛めしが目に留まる。薄く切った鯛の刺身を温かいご飯に乗せてとろろ汁をかけて食べるようになっている。朝から食べる鯛の刺身が実に美味かった。

■ハマ焼きを追って

翌日は、大川の奥さんがハマグリを食べたい、それもBBQのように焼きながらハマグリを食べたいというリクエストで“ハマ焼き”の店を求めて行くことになる。

ハマグリの旬の時期は2月から4月で、それは3月3日のひな祭りに縁起物として食べる習慣があることから分かる。もっとも旧暦のひな祭りは3月3日よりもう少し遅い。獲れる場所は、昔は日本全国どこで獲れたというが、現在最も有名な場所は鹿島灘で茨城県が全国の7割を占めている。鹿島灘は九十九里から見たら犬吠埼の向こう側なので近い。時期も場所もそれなりに合っているから簡単に店があるだろうと思っていた。

昨晚のことだ。ホテルのフロントで大川奥さんと一緒に近くにハマ焼きの店が無いかと聞いた。フロントにいたお姉さんは「この近くにはないですね」と申し訳なさそうに言う。それでももう1人のフロントのお姉さんも参加して、あれこれ相談し始めた。そして何軒か電話をかけてインターネットを駆使した結果、何とか店を探し出してくれた。



【ホテルのロビーとフロント】

この対応が親身で非常に良かったと奥さんは感心感激して、アンケートにバッチリ書いたと言っていた。

ハマ焼きとは全く関係ないが、私も感心したことがある。それはフロントで根掘り葉掘り聞いていた時に周囲を見渡していたが、ロビーが吹き抜けの空間を贅沢に使っていることだ。

そして今朝、昨晚フロントのお姉さんに聞いた店に電話すると定休日だと分かり、さすがにまたお姉さんたちに聞くのは申し訳ないので彼女たちの力を借りずに銚子漁港の近くの店を探し出した。ホテルから車で30分走り、店に着いたが、ここも定休日の看板が出ている。開いている店で聞いて回るが、どこもハマ焼きはやっていないと言っている。

4人で話し合い、この状況では今回は諦めるしかないという結論に至る。逆に次回の旅行プランが浮かんでくるから、それも楽しい。

■ どうする日本

今回の旅ではいろいろなことを4人で、あるいは男組の2人で話した。

銚子電鉄に乗ると、会社経営の難しさや日本の鉄道のことには話が及ぶ。そして日本の過疎地域の今後についての話になる。

圏央道を走っていると巨大な宗教施設や大仏が目を見く。宗教法人は税金が免除されており、一部の宗教法人は莫大に儲けているがその資金は国民の幸せに使われているのだろうか。日本における宗教とは、そんな話に発展する。

あるいは道を走っているとEV（電気自動車）が目にとまり話題になる。現在日本の自動車会社はEVで出遅れており、私も大川もFCV（水素自動車）になって欲しいと意見が一致する。自動車はどう進化するのか、そして今後の日本のエネルギー戦略について話題になる。

それらの話の最後は日本という国の今後の在り方だ。科学技術主体の技術立国は既に過去の話になっている。観光立国の話もあるが、日本の観光資源が世界と比べて乏しく、おもてなしと温泉だけでは心もとない。しかも今回のコロナのようなことがあれば致命的打撃を被る。

日本はどうやって生きて行けばいいのか、話は尽きない。

そんな時、ハマ焼きを諦めてラーメン屋に入った。

ラーメンを食べ始めて、「今や日本のラーメンやカレーは世界一美味しい」と奥さん連中が言っている。私が「出汁をとる食文化は日本だけで、それほど日本人の味覚は繊細ということだね」と言うと、大川は「オリジナルは日本ではなく中国やインドだけだね」と言う。それに対して私が「自動車もエレクトロニクスも、欧米で生まれて日本が育てた」と続ける。

彼は「そうだね、日本人はオリジナルを作るのは得意ではないけれど、創意工夫は得意で、改善は超一流だ」と言い、奥さん連中も「繊細で工夫の天才の日本人が真剣に取り組めばピッツァもハンバーガーも日本のものが世界で一番美味しくなるわね」と付け足す。

誰からともなく「今後の日本はグルメ立国だね」という言葉は発せられる。そして私が「それは妙案だ、料理は鮮度が重要だから人を呼ぶために温泉やおもてなしが活かされる」と賛同する。

ひょんなことからグルメ立国の話になったが、これは案外行けるかもしれない。

例えば旅行などのレジャー産業は衣食住が整っていることが前提で、後回しにされることが多々ある。やはり衣食住は優先順位が高い。中でも食が最も優先順位が高いだろう。人間は食べることが最重要だ。感染症や戦争でも人間は生き抜くことができれば、次は必ず食べることになる。

そして単にグルメ、つまり美味しいということに留まらないことが肝要かもしれない。ずば抜けて美味しいだけでなく食の安全はもちろん、食料安全保障のために安定的な供給もできるようにしていく。最終的には人の体をつくり、人の健康を支えるものを目指す。それを実現させるための農業、漁業そして科学技術、政治や社会システムが必要になるのだろう。

第六章 旅を終えて

■夫婦に乾杯！

私の旅友には独身あるいは配偶者はいるが夫婦一緒にはあまり旅行しないという人たちが比較的多い。しかし今回は夫婦一緒に旅行する人たちに声をかけて4人で旅行した。

それぞれの夫婦の関係性やライフスタイルが垣間見えて興味深かった。

それは例えばお金を出す時に表れる。私が宿を予約したことから私が宿代をとりあえず払って、後から割り勘にしてお金を受け取るのだが、その時に旦那さんか奥さんか、どちらが出すかが夫婦の関係性を表しているように感じる。やはり経済を支配する方が主導権を握るものだ。

宿での夜、4人で部屋飲みをすることが多かったが、年頃(?)の男女が入り交じっているので話題は多岐に渡り、身近な話題にはじまり、共通の友人、共通の趣味、子供や孫との関りの話、あるいは将来の話などでとても視野が広がる。しかしあまりディープな話題にならない。

今回実験的に夫婦4人旅を5週連続で行ったが、夫婦2人きりで行くのとは全く異なる。いろいろな夫婦に接し、鏡のように自分たち夫婦の姿を映しているようにも感じる。共通の夢や悩みも分かち合える。いや、それは言い過ぎだが、そのきっかけにはなる。つまり未来志向だ。

まさしく「夫婦に乾杯！」というものだろう。

この旅行記を読んでいる皆さんも、もしも一緒に旅行するならどの夫婦を誘うか。それを考えることも楽しい、そして実際に行ったらなおさら楽しいだろう。

■温泉評価委員会

私は温泉宿を評価する温泉評価委員会、通称「おひょい」を立ち上げている。それは温泉宿に泊まった時に組織される勝手気ままな委員会で、委員は同行した人になる。何が良かったとか悪かったとか、あれこれ話し合っって評価項目を5段階で評価し、委員会として評価値を算出する。ただし今回は私1人の意見で決定した。

評価項目は泉質、風呂、料理、コスパ、サービス、建物・部屋、立地環境の7項目で、平均値を総合点としている。温泉は泉質と風呂で分けており、立地環境はかつて秘湯度という項目だったが、都市型の温泉もあるのでロケーションや景色を総じて評価するようにしら。

評価基準は5段階としてその定義は、5は驚き感動、4は普通に良い、3は可もなく不可もない、2は普通に悪い、そして1は失望落胆としている。

亀の井ホテル鴨川は泉質3、風呂4、料理3、コスパ4、サービス4、建物・部屋4、立地環境4、総合点3.71になった。

湧出温度15℃、pH記載なし、泉質は含む硫黄・ナトリウム-塩化物・炭酸水素塩温泉（低張性弱アルカリ中冷鉱泉）になっている。

亀の井ホテル焼津は泉質 4、風呂 3、料理 4、コスパ 4、サービス 4、建物・部屋 4、立地環境 4、総合点 3.86 になった。

湧出温度 52°C、pH8.6、泉質はナトリウム-カルシウム-塩化物泉（高張性アルカリ高温泉）になっている。

亀の井ホテル熱海別館は泉質 3、風呂 4、料理 3、コスパ 4、サービス 4、建物・部屋 4、立地環境 5、総合点 3.86 になった。

湧出温度 46.7°C、pH8.0、泉質はナトリウム-カルシウム-硫酸塩・塩化物泉（低張性弱アルカリ高温泉）になっている。

亀の井ホテル潮来は泉質 3、風呂 4、料理 4、コスパ 4、サービス 4、建物・部屋 4、立地環境 4、総合点 3.86 になった。

湧出温度 21.2°C、pH 記載なし、泉質はナトリウム-塩化物泉になっている。

亀の井ホテル九十九里は泉質 3、風呂 4、料理 4、コスパ 4、サービス 5、建物・部屋 4、立地環境 4、総合点 4.00 になった。ハマ焼き探しのフロントの対応が 5 点の根拠になる。

湧出温度も pH も記載なし、泉質はナトリウム-塩化物強塩温泉（中性高張性低温泉）になっている。推定すると低温泉なので湧出温度は 25°C 以下、中性なので pH は 6~7.5 未満になる。

■鴨川旅行の記録

鴨川旅行は 2023 年 1 月 15 日（日）～1 月 16 日（月）の 1 泊 2 日、行程を以下に記す。

- ・ 1 日目 自宅を車で出て福沢夫妻を乗せて 10 時頃に近くのレストランで朝食兼昼食、アクアライン経由で房総半島に向かい、日本寺を拝観し鋸山を散策、15 時 30 分に亀の井ホテル鴨川にチェックイン
- ・ 2 日目 10 時ホテル出発、誕生寺拝観、自宅近くの店で昼食、解散

費用は 4 人で約 5 万 6 千円、1 人当たり約 14000 円になり、内訳を以下に示す。

- ・ 亀の井ホテル鴨川 40043 円（特別謝恩プラン 12470 円/人×4、夕食時飲み物土産物の支出総額 65899 円、それに対し割引が全国旅行支援 20%とそのクーポン券 2000 円 + 千葉とく旅 2000 円で計 4 人分 16000 円充当)
- ・ 日本寺拝観料金 2800 円（4 人分）
- ・ 誕生時駐車場料金 600 円（1 台分）
- ・ 1 日目の朝食兼昼食 4191 円（4 人分）
- ・ 2 日目の昼食 3005 円（4 人分）
- ・ 高速道路料金+ガソリン代 約 5500 円（走行距離 300km）

■焼津旅行の記録

焼津旅行は 2023 年 1 月 22 日（日）～1 月 23 日（月）の 1 泊 2 日、行程を以下に記す。

- ・ 1 日目 自宅を車で出て下田夫妻を乗せて東名高速に 11 時頃乗り、足柄 SA で昼食を食べ、静岡の駿府城跡見学後、15 時 30 分亀の井ホテル焼津にチェックイン
- ・ 2 日目 10 時にホテル出発、日本平からロープウェイで久能山東照宮に行き参拝、清水の「丸亀製麺」で昼食、夫妻を自宅まで送り解散

費用は 4 人で約 6 万円、1 人当たり約 15000 円になり、内訳を以下に示す。

- ・ 亀の井ホテル焼津 38676 円（特別謝恩プラン 10930 円/人×4、夕食時飲み物土産物の支出総額 55420 円、それに対し割引が全国旅行支援 20%とクーポン券 2000 円で計 4 人分 8000 円を充当）
- ・ 駿府城跡駐車場料金 200 円（1 台分）
- ・ 日本平-久能山ロープウェイ 7000 円（4 人分）
- ・ 高速道路料金+ガソリン代 約 15000 円（走行距離約 500km）
- ・ 1 日目足柄 SA の昼食 別々に支払い
- ・ 2 日目丸亀製麺の昼食 別々に支払い

■熱海旅行の記録

熱海旅行は 2023 年 1 月 29 日（日）～1 月 30 日（月）の 1 泊 2 日、行程を以下に記す。

- ・ 1 日目 朝 9 時に自宅を車で出て埼玉県の鶴田宅に行き 1 時間の立ち寄り、夫妻を乗せて 12 時頃に「丸亀製麺小田原店」で昼食を食べ、一夜城公園を見物 15 時 30 分に「亀の井ホテル熱海別館」にチェックイン
- ・ 2 日目 10 時にホテル出発、来宮神社参拝、「漁港の駅 TOTOKO 小田原」と「干物の山安ターンパイク店」に立ち寄り、埼玉の「ナポリのかまど」で昼食 鶴田夫妻を自宅まで送り解散

費用は 4 人で約 4 万 5 千円、1 人当たり約 11300 円になり、内訳を以下に示す。

- ・ 亀の井ホテル焼津 35118 円（特別謝恩プラン 10930 円/人×4、夕食時飲み物土産物の支出総額 51862 円、それに対し割引が全国旅行支援 20%とクーポン券 2000 円で計 4 人分 8000 円を充当）
- ・ 来宮神社駐車場料金 300 円（1 台分）
- ・ 高速道路料金+ガソリン代 約 10000 円（走行距離約 400km）
- ・ 1 日目昼食（丸亀製麺） 別々に支払い
- ・ 2 日目昼食（ナポリのかまど） 鶴田さんにご馳走になった

■霞ヶ浦旅行の記録

霞ヶ浦旅行は 2023 年 2 月 5 日（日）～2 月 6 日（月）の 1 泊 2 日、行程を以下に記す。

- ・ 1 日目 朝 8 時 30 分に自宅を車で出て JR 小山駅で菅原夫妻と待ち合わせ、夫妻を乗せて 12 時前「丸亀製麺筑西店」で昼食、筑波山ロープウェイ駐車場

霞ヶ浦ふれあいランド、15時30分に「亀の井ホテル潮来」にチェックイン

- ・2日目 10時にホテル出発、鹿島神宮西の一之鳥居、鹿島神宮参拝、JAXA 見学
筑波大学見物、昼食を抜いて JR 小山駅まで夫妻を送り解散

費用は4人で約4万2千円、1人当たり約10500円になった。尚、自宅から小山駅までの往復の交通費が別途約9000円は発生したがいれていない。内訳を以下に示す。

- ・亀の井ホテル焼津 35436円（特別謝恩プラン10930円/人×4、夕食時飲み物
土産物の支出総額52180円、
それに対し割引が全国旅行支援20%とクーポン券
2000円で計4人分8000円を充当）
- ・1日目昼食（丸亀製麺） 別々に支払い
- ・筑波山ロープウェイ駐車料金 500円（1台分）
- ・霞ヶ浦ふれあいランド入場料 1200円（4人分）
- ・鹿島神宮駐車料金 300円（1台分）
- ・高速道路料金+ガソリン代 約4500円（小山駅～小山駅まで走行距離約270km）
- ・高速道路料金+ガソリン代 約9000円（自宅～小山駅往復の走行距離約300km）

■九十九里旅行の記録

九十九里旅行は2023年2月11日（土）～2月13日（月）の2泊3日、行程を以下に記す。

- ・1日目 夕方、自宅を車で出て大川宅に行き、懇親会
- ・2日目 9時30分大川の車で出発、圏央道経由で12時銚子駅着、軽食を買って駅で昼食、
銚子電鉄に乗り終点の外川駅下車、戻る電車に乗り犬吠駅下車、犬吠埼灯台まで徒
歩で往復し犬吠駅から銚子駅に戻り、15時30分「亀の井ホテル九十九里」到着
- ・3日目 11時30分ホテル出発、圏央道の菖蒲PAのガンジャラーメンで遅い昼食、
16時大川宅到着、18時自宅に帰宅

費用は大川宅を出発して戻るまでの総費用は4人で約5万円、1人当たり約12500円になり、内訳を以下に示す。

- ・亀の井ホテル鴨川 37216円（特別謝恩プラン11630円/人×4、全国旅行支援の
20%割引で9304円/人になり、クーポン券は全国
旅行支援2000円と千葉とく旅2000円の4000円
が支給され、夕食時飲み物と土産物に全て使用）
- ・銚子駅駐車場 700円（1台分）
- ・銚子電鉄1日乗車券 700円（1人分 各自支払い）
- ・2日目の昼食（コンビニ） 別々に支払い
- ・3日目の昼食（菖蒲PA） 別々に支払い
- ・高速道路料金+ガソリン代 約11500円（大川宅～九十九里往復、走行距離400km）
- ・高速道路料金+ガソリン代 約5000円（自宅～大川宅往復、走行距離150km）